

10. 和束町保管の石器について

川崎雄一郎

1. はじめに

本報告は、和束町体験交流センターにて保管されている石器に関する調査報告である。同施設では、現在2点の石製遺物が保管されている。この資料は和束町内で発見されたものと推定されるが、遺物本体及び保管用の木箱に注記はなく、資料の来歴を示す情報は無い。また2点中1点は、人為的な加工及び使用の痕跡が確認できず、自然石の可能性が高い。今回は、人為的な加工があり、石器と認定できた資料についての報告を行う。

2. 観察結果

本資料は、棒状を呈する自然礫の端部を研磨整形した石器である。法量は、全長24.9cm、最大幅6.0cm、最大厚3.2cmである。石材は砂岩と見られる。研磨加工は、先端から6cmまでの範囲に施され、先端部の厚みを減らすことで片刃石斧の刃部状に整形している。ただし、加工は片面のみで、裏面を研磨していないため、刃部状の先端部はやや丸みを帯びており、磨製石斧の刃部としてはやや鈍い。先端部には研磨面を切るように、0.5cm程度の剥離が複数箇所で見られる。使用による損耗と見ることも不可能ではないが、剥離箇所が部分的であること、また剥離面の周辺に摩耗痕や線条痕などの使用による痕跡が確認されないことから、加工対象物との衝突による剥離とは考えにくい。この他に、器体の2ヶ所で、擦痕を確認した。いずれの擦痕も、先端部の研磨痕と比較すると、表面が粗く、研磨動作のストロークも短いことから、先端部の整形とは異なる要因による痕跡と判断した。ただし、先端部の研磨面と擦痕に切り合い関係はなく、新旧関係は不明である。また擦痕の範囲が部分的であり、加工の意図や石器の使用方法などを特定するには至らなかった。

3. 器種について

本資料は、先端部に研磨加工を施すことで、外見上は片刃の磨製石斧に類似する。刃部にのみ研磨を施す磨製石斧は、旧石器時代から弥生時代にかけて存在する。特に縄文時代早期前半にあたる押型文土器期の磨製石斧について、素材礫に剥離・敲打などの加工を施さず、刃部周縁にのみ研磨を施すものが多いという指摘がある（大下2002）。本資料も、部分的な研磨加工により刃部を作出した片刃石斧の可能性はある。しかし、先端部裏面に一切の加工が施されておらず、磨製石斧の刃部としてはやや丸みを帯びていることから、先端部の研磨加工を刃部の作出と認定するには疑問が残る。また研磨加工した先端部に使用痕が確認できないことから、実用的な道具ではなく、石棒類のような儀器である可能性も否定できない。

以上のことから、本資料は、片刃の磨製石斧である可能性があるものの、刃部の加工が甘く、



図1 石器実測図 (S=1/3)



写真1 研磨痕のある礫

使用痕跡も確認できないことから、積極的に磨製石斧と評価することは難しい。そこで、現時点では、本資料を研磨痕ある礫と分類するにとどめる。

4. まとめ

今回の調査の結果、和束町で保管されている石製遺物のうち1点は、人為的に製作された石器であると認定することができた。石器の所属時期を特定することはできなかったが、古墳時代以降の石器・石製品には類似する器種が存在せず、弥生時代以前の遺物である可能性が高い。現在、和束町内の周知の埋蔵文化財包蔵地に弥生時代以前の遺跡は含まれておらず、本資料が和束町内で発見されたものであるならば、未発見の遺跡の存在を示すものである。つまり、和束町域における最古の考古資料である可能性があり、町の歴史を考える上で重要な資料と評価できるだろう。

参考文献

- 大下 明 2002 「近畿地方と東海地方西部における押型文土器期の石器群について」『縄文時代の石器—関西の縄文草創期・早期—』関西縄文文化研究会
- 和束町史編さん委員会 1995 『和束町史』第1巻 和束町